

令和6年度 第2回白根巨摩中学校自己評価書（後期）

令和7年1月9日作成

校長 矢吹 和信

記述者 教頭 雨宮 文

学校教育目標

「思いやりの心と主体性・創造性を備えた白根巨摩中生の育成」

- ・学ぶ喜び・創り出す喜びを知り、主体的に学習する生徒
- ・正義を尊び、思いやりをもつ心豊かな生徒
- ・素直に見聞きし、考え、お互いを高め合う生徒
- ・心身ともに健康で、たくましく生きる生徒

重点取組

- 1 学習意欲と確かな学力の向上
 - ①教材研究の充実、効果的な授業の組み立て、学び合いを通しての深い学びの実現
 - ②信頼関係が保障される学級集団づくり
 - ③ICTの積極的な活用
 - ④家庭学習のさらなる改善
- 2 教育課程の改善と小中一貫教育に向けた取組の推進
 - ①本校の特長を生かす教育課程への改善
 - ②9年間を見通した教育課程の編成と改善
 - ③小中間での交流の推進（職員、児童生徒）
 - ④小中一貫教育に関する保護者・地域の理解の促進
- 3 生徒会活動における「4つのこだわり」と創造的な特別活動の推進
 - ①生徒会が掲げる「4つのこだわり」（挨拶、清掃、時間、服装）の生徒主体での推進・充実
 - ②これまでの成果をもとにした創造的な特別活動の推進

I 全体評価

※A:5点、B:4点、C:2点、D:1点と数値で換算し、平均4.0を目標と考えた。全20項目中19項目が4.0を上回る結果となった。（令和5年度後期は全ての項目が4.0を上回った）得点分布に関しては以下の通りである。

4.5以上：11項目 / 4.5未満：9項目

後期の総合的な平均は4.5（昨年度4.5）となり、前期自己評価の4.6とほぼ同様の結果となった。前期同様、一人一人の職員の意識や実践が高い水準を保っていると評価できる。また、前期の課題点への組織的・継続的な取組を行うなど、教師・生徒が目標達成のために努力した成果が出ていると考えられる。

特に「意欲的に学校運営に参画している」「他の教職員と協力し取り組んでいる」や「豊かな心を育てようとしている」や「合唱を文化活動の軸として適切に取り組んでいる」「教職員としての自覚をもって職務に従事している」の項目は4.8となった。また、「いじめやその他の問題行動等の早期発見・早期対応・早期解決に努めている」、「生徒理解・生徒指導・特別支援の観点に立ち、組織的な指導に努めている」の項目は、1学期と変わらず4.8となっている。白根巨摩中学校の教職員がチームとして一体となって、日々の教育活動に励み、生徒への指導に丁寧に取り組んだ成果だと考えている。

一方、課題点としては、依然として「ICTの有効的な活用」（3.7）があげられる。同質問に対し、「保護者」も3.8と評価得点が他の項目と比べると低くなっている。活用頻度は増してきているが、教科や教師個人により効果的な活用という点で課題が見られる。職員に対する研修も定期的に行いながら、職員間の情報共有を密にして、授業等での活用を推進していくとともに、端末の持ち帰りや家庭学習での活用について

も教務主任、情報担当教師らが連携し、推進していく。

来年度以降も教職員や地域・外部機関等がチームとなり、学校教育目標の達成のために課題解決にむけた効果的、継続的な取組を行っていく必要がある。また小中一貫教育についても小学校との連携をさらに深めながら、計画的で効率的な教育活動が行えるよう目指していきたい。

II 各領域の評価

1 学校運営

達成状況

◇領域平均は4.6であり、前期と同じである。職員室での様子や教職員一人一人の姿勢からも本校の職員は、本校教育目標の具現化に向けて真摯に努力しているといえる。
◇報告、連絡、相談、確認を適切に行っており、職場相互の信頼関係も良好である。
◇職員が個々の分掌に責任をもって、学園祭、強歩大会、合唱発表会等多くの行事を成功させたことへの成果が数値に表れている。

対応

- ・次年度以降も各種行事の内容等を工夫しながら、生徒主体の教育活動を推進していく。行事・活動を生徒とつくりあげる過程を大切に、充実感ある取組を教職員の支援のもとに行う必要がある。
- ・学校全体の教育活動に対して、組織的に取り組めるように細部に対しても状況を共有し、共通理解の中で検討・改善を行っていく。
- ・各自が勤務効率を考えた働き方についてセルフチェックを行い、ライフワークバランスを意識した勤務の在り方を共有していく。一人で悩むことのない開かれた職場環境を作りながら、管理職は教職員のメンタルヘルスについて細心の注意を払うよう心がけ、同僚性・協働性のある職場の構築に努める。

2 教科指導

達成状況

◇領域平均は4.2であり、中でもICTの活用は3.7となっており、課題が残る。
◇教師アンケート「学習指導要領を踏まえ、子ども主体の授業づくりにむけ、授業改善や適切な評価を行っている」は4.3（前期4.6）となっている。山梨スタンダードの徹底や小グループ活動やICTの活用を手段とし、子ども主体の授業へと改善を図っていくよう教材研究の時間確保等も含めて、校内で検討していく。
◇生徒アンケートの肯定的回答が「学校の授業は楽しい」は86.5%、「学校の授業がわかる」は88.2%となり、多くの生徒が授業に主体的に取り組んでいることがわかる。ただ、基礎学力に不安のある生徒への対応は今後も検討していく必要がある。
◇保護者アンケートの肯定的回答が「お子さんは、授業の内容がわかっていると思うか」は68.8%となっていて、項目の中で一番低くなっている。「学校は基礎学力定着のための指導をしていると思うか」が87.7%となっており、学校の指導方法については一定の理解をいただいているものの、成果については課題があることがうかがえる。
◇家庭学習については長年課題であったが、本校独自の取組として継続しているタイアップチャレンジ（週末課題）の定着により効果が上がってきている。端末の持ち帰りを活用した課題の提出も、効果を上げる要因となっている。生徒の肯定的回答は92.9%、保護者の肯定的回答は83.7%となっており、タイアップチャレンジを通じて家庭学習に向かう姿勢が定着しつつある。今後も家庭の協力を得る中で取り組んでいく。
◇「ICTの有効的な活用」については、保護者アンケートの肯定的回答は79.5%となってお

	<p>り、生徒アンケートの「授業でICTを使うと分かりやすくなる感じるか」については肯定的回答は87.6%となっている。今後さらに、授業の中でどの場面で有効的な活用ができるか、職員同士が日常的に学び合ったり、研修等を行っていく必要がある。</p>
<p>対応</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研のテーマである「聴き合い」や「学び合い」を通して互いを高める生徒の育成を目指していく。そのための手立てとして、これまで以上に有効的なICTの活用についての研修を行っていく。また、指導と評価の一体化の観点から、学習指導要領に対応した学習指導・学習評価についても研究を推進していく。 ・教師個人の授業力を高めるために、互いの授業を参観する機会を確保する。互いの工夫や改善について話し合い、具体的な改善ポイントについて共通認識をもてるような研究を行う。その際、効果的なICTの活用についても重要な視点として共有を図るようにする。 ・オンライン等も積極的に活用し、各種研修や研究会等への参加などを促し、授業の指導方法の共有や職員の資質能力の向上を図られるようにする。 ・管理職による日常的な授業観察を通して、指導・助言を継続して行う。 ・タイアップチャレンジを継続すると同時に、1人1台端末の持ち帰りを増やすことで、個別最適な学びにつながる課題の出し方についても工夫しながら実践していく。合わせて、連絡帳や定期試験の学習計画表の取り組み表を活用して、生徒が計画的に家庭学習を進めるように指導する。 ・小中一貫教育の取組において、さらに小学校の教職員との相互理解を深め、9年間を見通したきめ細かい児童生徒の育成を研究する。 ・保護者アンケートの数値の結果や記述内容から、引き続き基礎学力の定着や家庭学習の定着についての学校への期待は大きいことがわかる。「補充・発展の時間」等の効果的な活用、基礎学力定着のための支援体制の見直し、不断の授業改善等、今後も努力していく。また、小学校の家庭学習の取組等も情報共有しあいながら、より効果的な家庭学習の在り方を探っていく。
<p>3 生徒指導について</p>	
<p>達成状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇平均得点は4.8と前期と同様の数値であり、本校の教職員が継続して生徒に寄り添い、きめ細かい生徒指導を行っていることがわかる。 ◇生徒アンケート「学校生活は楽しいか」の項目においても前期と同様の4.5で、肯定的回答が93%となっている。また、「困ったときに相談できる先生がいるか」についても4.5となっていて、生徒との関係の構築ができており、教師が生徒に寄り添い、素早く適切な対応がなされている様子がうかがえる。また、保護者アンケート「お子さんにとって、学校は楽しい所だと思うか」も肯定的回答は91.2%を超えており、多くの保護者から理解を得て教育活動に取り組んでいると考えられる。 ◇関係機関と連携しながら不登校等のケース会議を行っている。また学区内の小学校に勤務するSC、近隣の未成年の事件等に係るSSを交えた生徒指導支援委員会を毎週開催し、連携・協力しながらの生徒指導を行っている。また、生徒とのやり取り帳（連絡帳）や、年5回の心配事アンケート調査と個人面談等により、生徒の様子を見取り、適切に指導しており、状況に応じて外部機関からの支援や助言を参考にしながら、個に応じた支援を心がけている。 ◇保護者アンケート「学校は、子どもの困ったことや悩み事等に、対応していると思うか」の肯定的回答は92.1%である。ただ、「学校での生徒の様子を保護者と共有できているか」については、「できている」と感じている割合が、保護者が95%、生徒は約87%となっている。学校で生徒一人ひとりの様子を注意深く見守り、保護者との情報共有を密にすることで、保護者とよ

	<p>り一層の連携を取る必要がある。</p>
対応	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、生徒への声かけを積極的に行い、道徳や総合、特別活動などの授業を通し、心の教育をさらに充実させ、問題行動の未然防止策を図っていく。また、問題を抱える生徒や人間関係について、情報共有を素早く確実に担任や学年で行い、家庭にも伝えることで、早期に解決していく。 ・今後も全教職員が相互に連携し、学校のきまりや指導重点について共通理解し、組織的な生徒指導を行う。また、学年を問わず報告・連絡・相談・記録などを丁寧に行い、必要に応じて関係機関とも連携していく。 ・小学校との連携を密にし、小学校での様子や人間関係を共有し、相談できる体制を構築する。「やりとり帳」や「悩み事アンケート」、担任との二者懇談等、日常的な生徒とのコミュニケーションの中から、トラブルを未然に防ぐように対応する。 ・SNSにおける危険性など、様々な生徒指導の未然防止に向けて、外部の専門機関等を招聘し、具体的な事例を踏まえた指導を行っていく。
<h4>4 特別活動</h4>	
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> ◇平均得点は前期と同じ4.5である。教職員も生徒たちと苦労をともにし、生徒との一体感をより多く感じたと考えられる。生徒アンケートの「行事への満足度」の肯定意見は98%を超えた。学園祭や合唱活動は、ひとつの作品を創り上げる過程で、様々な力がつき、充実感を得られたと考えられる。 ◇生徒アンケートでは「生徒会活動」「行事への協力」「合唱活動」のいずれにも97%以上が肯定的評価であった。なかでも「行事はみんなで協力して楽しくできているか」については、約98.8%が肯定意見であった。生徒たちが行事を通して、協力しながら目標を達成しようがんばり、大きな達成感を味わうことができたと思われる。 ◇「部活動の指導」の評価は4.4と前期と同様であった。複数顧問制の導入や外部指導者の協力により、先生方の負担を少しでも軽減していく、今後さらに部活動の地域移行を含め、地域指導者の部活動への支援を広げていく必要がある。 ◇「合唱」については、本校の伝統として受け継がれていっている合唱活動の意義を確認しあいながら、本校の特色のある活動として合唱活動の推進を行っている現状の成果である。
対応	<ul style="list-style-type: none"> ・行事の日程・内容等を精査・工夫しながら、生徒の心身の成長に寄り添ったものとなるように計画していく必要がある。特別活動を積極的に行っていくことは、より良い人間関係の構築や豊かな心の育成等、教育的意義が大きい。 ・行事の反省を分析し、行事および生徒会活動全般を見通しながら、来年度の年間計画に位置付けていく。生徒が自主的・主体的に取り組むことができるよう教師の支援体制についても工夫していく。 ・部活動の在り方を含め、教職員のライフワークバランスへの意識を高め、教職員が疲弊しない取組となるようさらに検証・改善していく。

5 健康安全・信頼される学校

達成状況

- ◇教員アンケートの領域平均は「健康安全」が4.7となっており、校舎内外への施設設備の定期的な点検や早期の改善、日生徒への健康安全の配慮等、過ごしやすい学校生活に対する生徒への細やかな対応についての意識は高い。
- ◇「教職員としての自覚を持って、職務に従事している」は前期同様4.8となり、教職員が教員としての責任と自覚をもって、生徒の育成に携わっていると考えられる。
- ◇「危機管理（健康安全・事故・加害行為・災害等・個人情報・綱紀保持等）を意識した教育活動にあたっている」は4.4（前期4.7）であった。学校がすべての生徒にとって安心・安全な場所となるよう、また、教職員の意識を高め服務規律の確保の徹底を図る。
- ◇保護者アンケート「保護者の相談等に丁寧に対応しているか」の設問に97%、「通信・メール等で学校の様子を伝えていると思うか」の設問に96%が肯定的回答をしていることから、学校は、保護者にとって相談しやすく、お互い様子が伝わりやすい環境だと考えていることがわかる。
- ◇保護者アンケート「学校は子どもの安全に配慮し、安全管理及び安全指導に努めていると思うか」の項目について、肯定的回答は96%であることから、本校教職員が子どもの心身の安全に配慮しながら教育活動に取り組んでいると保護者が考えていることがわかる。
- ◇生徒アンケート「家の人と学校生活の様子などについて話をするか」は4.4となっている。ただ、否定的回答は12.9%で約1割の生徒が家庭での保護者とのコミュニケーション不足であることがうかがえる。このことから、学校での様子について各家庭との連携を深める取組を行っていく必要がある。

対応

- ・教職員の様々な危機的状況を想定する意識を高める必要がある。日々の教育環境の点検、生徒のきめ細かい見取りなど、全教職員が情報共有を行いながら教育活動に取り組み、校教育目標の具現化を図っていく。
- ・教職員の「危機管理」意識を高めるため、危機管理とは何か、信頼される教職員であるために必要な資質とは何か、など原点に立ち返り、教職員としての在り方を見つめなおす機会を設ける。生徒の安全・安心を確保するために教職員がすべきことを明確にするとともに、教職員一人一人が服務規律の確保により一層意識を高め、取り組んでいくよう自己点検チェックを行ったり、管理職のきめ細かな声掛けなどを増やしたりしていく。
- ・部活動や特別活動での安全対策や指導方法について、事後に反省・検討・改善を行い、常に改善すべき点や努力すべき点について全職員で情報共有していく。
- ・学校生活において心配な状況のある生徒については、家庭環境も把握し、状況に応じて全職員に情報共有しながら組織的な生徒指導を行っていく。また、生徒と保護者のコミュニケーションを図る方策として、家庭への電話連絡はもとより連絡帳や通信等を活用する。
- ・「学年だより」「保健・図書だより」「学校メール」等学校からの情報発信を積極的に行うとともに、家庭との連携を密にし、生徒の健全育成に向けて一層努力する。特に、様々な情報提供も含め学校メールを活用し、積極的な情報提供を行っていく。
また、キャリアパスポートやテスト取組表等に保護者のコメント欄を設けたり、来年度学校開放日の日数を増やしたりする等検討し、学校での生徒の様子を保護者が知る機会を増やす。
- ・今後も地域からの声や支援を大切に、本校の「PTA」「体育・教育後援会」等の組織を積極的に活用したり、地域の関係機関と協力したりしながら地域全体で子どもを育てる意識を醸成する。

